

令和7年度

少年の主張コンクール山口県大会

発表文集



山口県青少年育成県民会議
山口県・山口県教育委員会
(独) 国立青少年教育振興機構

【はじめに】

少年の主張コンクール山口県大会は、国際児童年（昭和54年）を記念して始めたもので、今年で47回目を迎えました。

このコンクールは、県内の中学生の皆さんが、広い視野と柔軟な発想、創造性と共に自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身につける契機となることを願い実施しています。

今年度は、令和7年8月23日（土）山口県教育会館（ホール）において山口県大会を開催いたしました。応募作品総数584編の中から、各市町教育委員会等（1次審査）、当県民会議（2次審査）による原稿審査で選ばれた8名の主張は、会場にいた多くの人の心を動かしました。

8名の発表後、村岡知事から発表者に対し、「みなさんの発表はわかりやすく我々も聞きながら、一緒に悩んだり、胸が締め付けられたり、胸が熱くなったりということと一緒に感じさせてもらいました。みんながこれから生きていく社会、そして、生きていくみんなが今考えている挑戦などに向かって大いに成長されることを願っています。」とエールが送られました。

また、審査員の濱崎先生は、「誰かのせいにしたり、逃げたりせず、まっすぐで素直な心と言葉によって客観的に捉えられた確固たる考え方をもって課題に向き合う皆さんの発表は、大変感動しました。」と講評されました。

この文集はそんな8名の中学生の主張を記録したものです。中学生の皆さんのお見や主張を通して、私達は新しい視点を得て、改めて自分自身や社会について考えることで、今後の青少年の健全育成活動等に幅広く生かしていきたいと思います。

終わりに、本大会の実施に当たり、御尽力いただきました関係者の皆様、また、御参加くださいました皆様に厚くお礼申し上げます。

令和7年12月

山口県青少年育成県民会議

目 次

▽山口県大会スナップ 1

▽発表作品

【最優秀賞】

(県知事賞) 「食」と向き合う
山口県立高森みどり中学校 3年 須田 青慈 3

【優秀賞】

(県教育長賞) 私だから伝えられること
周南市立富田中学校 3年 田邊 優衣 5

(県民会議会長賞)

言葉の強さ
下松市立久保中学校 3年 三浦 仁太 7

【優良賞】

※当日発表順に掲載

家族と地域の温かさ
萩市立萩東中学校 2年 大松 凜也 9

この一瞬にすべてを込めて
下松市立久保中学校 3年 岡村 美咲 11

「今」の私ができるまで…

周南市立桜田中学校 1年 高松 希杏 13

挑戦

山口県立高森みどり中学校 3年 北奥 桃嘉 15

小さな行動がつくる未来

周南市立太華中学校 2年 船越 煌莉 17

▽少年の主張コンクール山口県大会実施要綱 19

▽大会審査基準・大会審査委員・大会の様子 21

山口県大会スナップ

☆村岡知事あいさつ



☆浅原会長あいさつ



☆村岡知事から発表者へのエール



☆瀬崎審査委員講評



☆表彰風景



最優秀賞（県知事賞）

「食」と向き合う

山口県立高森みどり中学校 3年

須田青慈

人は、生まれて間もない頃の記憶をもっていない。しかし、そんな時期に、僕には人生を変えるような出来事があった。千葉県松戸市で過ごしていた生後5ヶ月のことだ。ある日を境に、水から有害物質が検出されたり、放射性物質を含む野菜が、出荷停止になったりした。そう、その出来事とは、東日本大震災、福島第一原発事故のことである。

会社員だった父も、都会に慣れていた母も、安心して子育てをするため、山口県の山間地域への移住を決めた。そこは人口500人、近所の人と採れた野菜を渡し合う温かい場所だった。それからだと言う。父と母が「食」に気を遣い始めたのは。父は一から農業を学び、農家を始めた。母も、父を手伝うようになった。東日本大震災で、僕達家族の人生は、180度変わったのである。

人は、食べ物抜きには生きていけない。ただ、僕達は、食べ物は当たり前のように毎日手に入るものだと信じている。実際そんな簡単なものではない。一食一食に大勢の人達が関わっていて、何かあると、今までそこにあった一食は、もうないのである。こんな体験をした僕だからこそ、「食」に関して考えたことがある。

まず一つめは、農業の大切さである。父は、雨の日や暑い夏でも、毎日畑で作業している。その姿は、本当に大変そうだ。しかし、農業は人の「生命(いのち)」を育む大切な仕事だと思う。日本の食料自給率は低く、多くを輸入に頼っている。世界の人口が増え続け、気候変動が進行する中、今までどおり食料を輸入することができるのか。それは難しくなってくるだろう。これから農業をもっと活性化し、少しでも多くの食料を自国でまかなえるようにしなければならない。しかし、現実には生産者の年齢層は高く、跡つぎがないという声を耳にする。僕は、幼い頃から野菜が育つのを見てきた。自分で植えた苗の成長は、とてもうれしいものだった。そこで、子ども達や若者が、農業を体験する機会をもっと増やしてはどうだろうか。食べ物を生産する難しさや喜びを身をもって知るだけでも、農業の大切さに気づくきっかけになる。そして、生産者への感謝や応援したいという気持ちが、地産地消の促進につながるのではないかだろうか。

一方で、食品ロスの問題もある。日本では大量の食品が、毎日廃棄されている。給食でも、注ぎきれずに余ってしまうことがある。そんなとき、僕はおかわりをして、食缶を必ず空にする。父や近所の方の一生懸命な姿を思うと、無駄にはできないからだ。先ほどの「農業体験」は食品ロスの削減にも役立つと思う。外国では、紛争や貧困などで、一日一食さえ満足に食べられない人も大勢いる。食品ロスの問題を考えることは、世界中の人々の幸せを考えることでもある。

そして、もう一つは、「食」を通じての団らんの大切さである。現代の食事は、短時間で済むようになった。ほとんどの家が共働きで、みんな忙しい。だからこそ、晩ご飯のひととき、「食」を楽しむ時間が必要なのではないかと思う。食べながら、生産者の苦労や遠い国の人々に思いをはせること、それだけでも「食」をめぐる問題の解決に向けて、小さな一步になるのではないだろうか。

14年前の出来事がなかったら、僕は「食」についてこんなに关心をもたず、食べ物は当たり前のように手に入るものだと考えていただろう。でも今は、「食」が手に入るまでの苦労やありがたさを知っている。そして、これから「食」は、僕達若者が守っていかなければならぬないと気づくことができた。未来の僕達、生まれてくる子ども達、世界中の人達のために、僕達は、「食」と向き合うべきだ。大きな行動でなくても、小さなみんなの「关心」は、生産者、農業の支えとなる。そうすれば、「今ここにある食卓」だけでなく、「未来のどこの食卓」にも新鮮な食材と笑顔があふれている信じている。



優秀賞（県教育長賞）

私だから伝えられること

周南市立富田中学校 3年

田邊優衣

「私は原稿を読むことができません。」

視線が集まる。空気が変わる。自分の言葉で伝えきると覚悟した。

私は富田中学校の生徒会副会長を務めている。そして私は吃音症である。吃音とは円滑に話すことが難しくなる症状のことを指し、言葉を繰り返したり、出づらくなったりすることがある。緊張してうまく話せないといった経験のある人は多いかもしれないが、波はあるものの、私の場合はそれが常に続き、自分の意思でコントロールはできない。だから、できないと決めつけて諦めたことがたくさんあった。小学生低学年までは行事の司会や発表などに積極的に参加していた。高学年になると授業での発言も減り、からかわれることを恐れた。そして中学生になり、始めは人前で話すことを避けていたが、環境が昔の私に近づいてくれて、授業での発言やクラスメイトへの呼びかけ始めた。そして、私は生徒会役員となった。一年間吃音を隠すように活動した。それが、私の挑戦にストップをかけていたのだと思う。本当に悔しかった。他のメンバーの力になれなかつたことが。だからこそ、次の生徒会役員選挙に絶対に出る。

肌寒さとともに、生徒会役員選挙に対する意識を感じる時期になった。緊張により、吃音の症状は現れやすくなると言われている。私も例外ではなく、その影響を受けていた。話そうとすると、言葉が出なくなる。喉の奥に話したいことが渋滞して、その音たちは口に上がってこようとしない。思い通りの言葉が出ずには話を諦めてしまったり、黙り込んでしまったりすることも多くあった。この状態で選挙に出ることができなのか不安でしかなかった。こんな自分に生徒会なんてできるのだろうか、と吃音をきっかけにマイナスな気持ちが侵食ってきて諦めることも視野に入っていた。だが、ある高校生が中学時代生徒会長をしていたことを伝える動画を見た。その人は吃音をもっていて、そのことを選挙で全校生徒に伝えたそうだ。そして、その人はこう話す。

「吃っても良いという安心感を得て、吃音への気持ちも前向きに捉えることができるようになりました。」

「逆境を乗り越えながら自分の思いを伝え続けるってすごくかっこいい。」
そう私は強く思った。

そして本番、私は原稿通りに演説をしなかった。できなかつたのではない。しなかつたのだ。事前に先生の許可を得て、実現することができた。私の公約は「やってみるができる学校づくり。」名乗ることもできず、公約の詳細も十分には語れなかつた。だが、「私が伝えていきます。」この言葉は何があろうと伝えた。決して方法は一つだけではない、「やってみる」のハードルは下げられるということを。結果は当選。生徒がどんな私でも認めてくれたのだと嬉しく思った。最初は自分の後悔を拭うためだったが、いつしか、誰かの不安を拭いたいと望んでいた。

私は何度も今のように吃音について伝えてきた。ときには厄介になることもあるが、吃音がなかつたら私ではないのだと思う。もちろん、私に見えないことはあるが、他の人が見えないことを私はしっかり見ている。

「私は原稿を読むことができません。」

から始まつた私の演説。何かと吃音を理由に様々なことを諦めてきてしまつたが、そんな必要は微塵もない。私はそれが分かつたから今ここに立つてゐる。他の誰かと同じようにする必要なんて、もっとない。逆境を乗り越えながらも自分の思いを伝え続けるって、すごくかっこいいじゃないか。

これからも私だからできることを続けていく。



優秀賞（県民会議会長賞）

言葉の強さ

下松市立久保中学校 3年

み うら じん た
三 浦 仁 太

皆さんには、両親はいますか。私の両親は、私が小学四年生の頃に離婚しました。今は、父と兄と三人で暮らしています。今時、親が離婚するのは珍しくありません。しかし、小学生の私にとって、それは受けいれがたいことでした。いえ、信じられませんでした。「これは何かの間違いだ。そうだ、きっとこれはドッキリなんだ。」とずっと心の中で唱えていました。そうしないと、自分が壊れてしまいそうで怖かったからです。しかし、普段は全く泣かない兄が泣いているのを見て、「あっ、これは間違いでもドッキリでもないんだ。本当なんだ。」と分かると同時に、いろいろな気持ちがあふれ出しました。両親が離婚することへの悲しみ、この家庭に生まれたことへの憎しみ、他の平和な家庭への妬みなど、全部挙げたらきりがありません。小学生の私には、この現実を受け止めることができ本当に辛かったです。

母が家を出る日のことは、今でも忘れられません。母は、「お仕事、行ってくるね。夜勤だから、明日の朝まで帰れないの。お留守番頑張ってね。」と私に言いました。母は、私が不安にならないように、嘘をついたのです。しかし私は母がもう家に帰ってこないことを知っていました。けれども、いや、だからこそ、私は笑顔で、

「いってらっしゃい。」

と言いました。その日の夜、私は分かっているにも関わらず、母が帰ってくるという僅かな希望を抱いて眠りました。しかし、朝起きても母は帰ってきませんでした。

私は絶望しました。その日から、私は生きる光がなくなったように感じました。学校では両親の離婚について一切触れず、「いつも通り」を演じていました。少しでも自分の感情を出すと、学校のみんなを妬む気持ちが爆発してしまいそうだったからです。その頃から、私は、心の中の思いを押し殺し、上から嘘を塗りたくることが普通になってしまいました。思いを押し殺すことによる疲れやストレスさえも押し殺す、そんな無限ループにはまってしまいましたが、何も感じることはありませんでした。

ある日、学校から帰る途中、友達が不意に

「大丈夫？」

と声をかけてきました。どうやら、疲れやストレスが蓄積されすぎて表に出てしまつたようです。すぐにそれらを無理やり押し殺して、「大丈夫だよ」と言おうとする前

に、彼は、「辛いことがあったら何でも相談してね。だって僕たち、友達でしょ。」と言いました。彼は何気なく言ったのかもしれません。でも、私の心には一筋の光が差し込み、それまでのやもやがぱっと晴れたように感じました。本当の思いをひた隠しにしていた私の心は、実は誰かの優しい一言を待ち望んでいたのだと気付きました。

その日から私は、自分の気持ちに嘘をつくことや、人を妬むことを止めました。私は再び、より多くの友達と笑顔で会話することができるようになりました。あのときの彼の一言が、私にもう一度、生きる光を灯してくれたのです。

私は、今、生徒会長を務めています。友達は「仁太、仁太」と気軽に声をかけてくれます。「仁太ならできるじゃろー」とも言ってくれます。こうして、今、私が楽しく生活できているのも、全ては彼がかけてくれた言葉のおかげです。次は私の番です。彼が私を救ってくれたように、今度は私が、何かに困ったり悩んだりしている人を救いたいです。そして、伝えたいです。「自分の気持ちに嘘をつかないで。苦しいときは苦しいと言ったほうがいいよ。私があなたの思いを受け止めるから。」と。



優 良 賞

家族と地域の温かさ

萩市立萩東中学校 2年

おお まつ りん や
大 松 凜 也

私の家は母子家庭だ。家族構成は、母と兄二人と弟。しかし、今は兄二人が自立して家を出たので、三人で暮らしている。

今、私たちは、地域の人達のおかげで、普通の生活を送ることができている。私たちのために、食事や金銭面で援助してくださる方もいらっしゃる。また、行政の方が母や私たち兄弟のために、家を訪問していろいろな相談にも親切に対応していただいている。

私の家族は、全員が個性をもっている。上の兄は、とても優しくて、ゲームを買ってきてくれるし、一緒に遊んでくれる。しかし、怒るととても怖くなる。兄に怒られた時は、たまに晩ご飯を食べられなくなるくらいだ。下の兄は、一人でいることが好きで、たいてい自分の部屋に居る。でも、上の兄と一緒にゲームをしたり、友達の家へ勉強しに出かけたりすることもある。いつもは穏やかな兄だが、怒った時のどなり声は上の兄よりも怖く感じるから不思議だ。上の二人の兄は、とても仲が良く、二人で一緒に行動していることが多い。

一方、弟は遊ぶことがとても好きな小学生だ。ゲームは僕よりも上手で、難しいクエストもすぐに終わらせてしまう。だが、病気がちで、人の悪口を言ったり、ゲームで負けたり、嫌なことがあったりすると、人や物に当たったりなどの短所がある。けれども、兄弟の中では私と一番仲が良い。

母は一人で、私たち子供四人を育てている頑張り屋だ。家事はもちろんのことだが、仕事も無理のないペースで行っている。しかし、今は仕事をしているが、この仕事に就くまでの数年間は、事情があって仕事に就くことができなかつたのだ。そんな母が数ヶ月前から訪問看護の人と関わり始めた。世間話をしながら、面接のアドバイスをもらい、そのおかげで今母は仕事に就くことができたのだ。母が家計をきりもりし、家族三人の生活が成り立っている。四人の子供の生活や学校で必要な物を買ったり、子供たちが買って欲しい物を買わされたりするので、親として大変な思いをしていると思う。

私は子供食堂のボランティアスタッフに参加し、いろいろなお手伝いをしている。子供食堂での役割は主に、外で子供達と遊ぶことだ。その他にも写真を撮ったり、配布する米を袋につめたりする。自分よりも年下の子供達と遊んでいると、一人一人の

子供の知らなかつた意外な特技や行動を見ることがある。でも今、私たちスタッフがやっていることは、ほんの小さな支えにしかならないかも知れないと思うと、ぐつと心にくるものがある。自分が関わることで、幸せな暮らしができるといいなと強く思う。子供食堂では、保護者や私と同じスタッフなどいろいろな人と関わることができる。大人のスタッフの人からアドバイスをもらったり、仕事や家事で疲れている保護者が休むことができる時間を作ったり、自分の役割が明確になっている。だから、今の活動がこれから先の私の人生に役立つ時がくると信じて、自分のできることを精一杯頑張っている。

自分の今の生活は、一緒に暮らしている優しい家族や、様々な援助をしてくださるたくさんの方々のおかげだと改めて実感し、感謝している。だからこそ、自分が今やっていることや、これから学ぶこと、経験していくことを大切にしていきたいと思う。そしてお世話になったすべての方々への恩返しとしてあいさつや地域の清掃などを積極的に行い、私をとりまくすべての人を明るくできるように、自分なりに頑張っていきたいと思う。



優 良 賞

この一瞬にすべてを込めて

下松市立久保中学校 3年

岡 村 美 咲
おか むら み さき

私たちの人生は、数え切れないほどの一瞬の積み重ねでできている。一年、一ヶ月、一日、一時間、一分、一秒。どれも貴重な時間だ。私たちは往々にして未来ばかり考え、過去に囚われ、肝心の「今」を見失うことがある。私もそうだった。

中学二年生の冬。その日はいつも通り、大好きなハンドボールを、大好きな仲間たちとプレーしていた。その日行われるのは三試合。第一試合から、予想もしなかった未来が待っていたのだ。前半、戦闘を繰り広げている中で相手選手と衝突し、後頭部を強打した。痛かったのかもしれないが、私は、試合のことだけを考え、そのままプレーを続けた。大丈夫だろう、そんな軽い気持ちで残り二試合も終え、帰路に着いた。その日は、珍しく帰りの車の中からどっと疲れが出て、帰宅後、すぐに休んだ。翌日から、頭痛が続いた。病院では、脳振盪と診断された。「休んでいればすぐ治る。」私は、自分にそう言い聞かせた。

しかし、数週間後に私の生活はガラッと変わった。いつも通りに学校生活を送るのが辛いのだ。クラスメイトの声、机や椅子などの物音、全てが普段の五倍くらいの音量で耳に入ってくる。さらには、照明や太陽光などの明るい空間にいることも辛かつた。

次の受診で迫られたのは、二週間の点滴入院か自宅療養の二択。「家がいい。」私はそう言った。自宅療養中は、毎日2ℓのスポーツドリンク摂取、食事やトイレ、風呂以外は横になる。これが、私に与えられた、体を治すためのものだ。今まで普通に過ごしてきた日常ががらりと変わった。分かってはいても、何もできない日々の苦しさ・辛さは、今でも鮮明に思い出すことができる。

それを変えてくれたのは、一人の同級生。一緒にたくさんの水分をとってくれた。学校もあるのに、たくさんの言葉をくれた。おかげで、私の苦しさは楽しさに変わつていった。

三年生。私は自宅療養から解放され、毎日楽しい日々を送っている。幸せだ。勉強できること、友達と他愛のない話をしてすること、そして、何より、こうして学校に通えることが。それまでの私は、友達と話すことは当たり前だと思っていた。勉強するものが面倒くさいなと思ったこともある。大好きなハンドボールだってそう。きつい練習の時、思い通りのプレーができず先生に怒られたときは、嫌だなと思った。でも、

今まで何気なく行っていた、当たり前と思っていたことが、実は当たり前ではなく、有難いことなのだと気付いた。

ハンドボールができなかった期間は、本当に辛かった。再びコートに立てるようになったのは三年五月。それまでは、チームメイトのために準備や声出し等、できることを頑張った。その中で、試合にでるのは当たり前じやない、たくさんの人々に支えられているからこそプレーできるのだと実感した。また、コートに立てない人の辛さも分かった。試合に出たいという思いは、誰だってある。だから、コートに立てて当然ではなく、コートに立てて有難いという気持ちをもってプレーしたいと強く思うようになった。久しぶりにチームメイトと練習をした日の感動は、これからも忘れる事はないだろう。そして、今まで以上にハンドボールが好きになった。

人生は何が起こるか分からない。私は、この経験以来、「今」を意識するようになった。一流のアスリートやアーティストは、限界を超えた最高のパフォーマンスをするために、練習や準備の段階から、「今」に全神経を集中させている。私はアスリートではないが、後悔しないように「今」を精一杯生きていきたい。そして、その「今」を「明日」という未来に繋げていきたい。だって、今の私は、過去の私が作ってくれたものだから。



優 良 賞

「今」の私ができるまで…

周南市立桜田中学校 1年

たか まつ の あん
高 松 希 杏

私には、ある特性があります。周りのことが、よく見えていなかったり、物をよく忘れたりするのが一例です。それが、自閉スペクトラム症、ADHD という発達障害だと知ったのは、六年生の終わりごろのことでした。おそらく、大抵の人は、自分に障害があるということをカミングアウトすることには、抵抗があると思います。周りからどう思われるのかが不安だからです。それでは、私がなぜこうしてカミングアウトしようと思ったのかこれからお話ししていこうと思います。

私は、小さい頃、保育園に通いながら、リハビリテーション病院の訓練にも通っていました。ここでの作業療法、言語療法の先生たちとの関わりは、とても楽しいものだったように記憶しています。ほめてもらい、共感してもらうことが多かったからだと思います。

そして、小学校入学を迎えました。保育園は隣の市だったので、知っている人は一人もいませんでした。そんな一年生になったばかりのころ、私は授業中にもかかわらず、教室から逃げ出してしまうこともありました。

「のあんちゃんが、いません。」

と、担任の先生が SOS を出して、支援員の先生を探してもらっていたということを、少し大きくなってから聞きました。また、クラスメイトにもあまり関心がなく、友達も作ろうと思わなかったため、友達と呼べる人は誰もいなかったように思います。さらに、被害妄想も激しく、周りの人のことを、みんな敵のように感じていたように思います。どうしてなのか、今思い出しても、よく分かりません。ただ、その時は、自分ではそんなに困っていたという印象はありません。多分、困っていたのは、先生や周りの人だったのでしょう。

そんなとき、私に声をかけてくださったのが、支援学級の先生でした。私は、一年生のころは、まだ支援学級の児童ではありませんでした。

「のあんちゃん、きららで一緒に勉強してみない？」

との言葉に、私はすぐにきららに行ってみることにしました。人数が少なく落ち着けそうだし、パズルや教具も魅力的だったからです。そこで学習を続ける中で、支援学級の先生は大切なことを教えてくださいました。それは、授業など、やらなくてはならないことからは逃げ出さないこと、みんながみんな敵ではないこと、自分を分かつ

てくれる人は必ずいることなどです。そして、何でもやってみれば「私ならできる。」ということを、優しく、根気強く、何度も繰り返し話してくださいました。学習に対する不安や、できなくて落ち込むことの多かった私が、少しづつ「できた。」を体験することができ、学校生活が楽しいものに変わっていったような気がします。

もう一つ、私を支えてくれたのは、友達の存在です。二年生からきらら学級に在籍しましたが、普段の授業や生活では、今までと変わらず話しかけてくれました。人の関わりが苦手だった私にも、仲良しの友達ができました。その友達とは、勉強の話をしたり、同じ趣味の話で盛り上がったりしています。まだまだ、おっくうになることもありますが、少しづつ、自分から誘うこともできるようになってきています。

自分に自信がなく、すぐ諦めていた私、何か嫌なことがあると、逃げ出していた私。そんな私が変わってきたのは、周りの人のおかげだと感じています。支援学級の先生は、私の特性を理解して、最大限のサポートをしてくださいました。その事実に、私は救われました。そうして、相手のことも、自分のことも大切にすることができるようになったので、良い友達もたくさんできました。

私のことを分かってくれる人がいる。支えてくれる人がいる。そう思うことで、自信をもてるようになりました。小学校二年生から六年生まで、支援学級に入り、支援学級の先生や生活指導員の先生、担任の先生、家族、友達など、たくさんの人々に支えられてきました。そして、中学生になった今、私は支援学級を卒業し、通常の学級でスタートを切りました。たくさんの人からの支えによって「今」の私ができます。

これから先も、たくさんの困難が待っていると思います。くじけそうになったり、つらかったりすることも、多いことだと思います。人生は、人の関わりによって大きく変化します。これまで、私のことを理解してくれる人に出会えたことに感謝しています。そんな私は幸せ者です。これらのこととは、私の生涯の宝物です。今の私は、たくさんの人からの支えによってできている。そのことを知ってほしいと思い、カミングアウトしました。これからも自分らしく生きていきます。



優 良 賞

挑戦

山口県立高森みどり中学校 3年

きた おく もも か
北 奥 桃 嘉

私は今、生徒会長として、学校のスローガンに「挑戦」を掲げています。その理由は私が生徒の皆さんに一番頑張ってほしいと思っているものが「挑戦」だからです。私の今の目標は、学校全体の明るい雰囲気や向上心を高め、生徒の皆さんの夢や目標を叶えることです。実は私は今まで、やってみたいことがあったとしても、「私にはできないかも」と尻込みすることが多かったです。でも今では「挑戦」の大切さを心から実感しています。そのきっかけは、「小学生時代の苦い思い出を繰り返したくない」という一心でした。

私は小さな頃から人見知りで、人に素の自分を見せたり、素直に気持ちを伝えたりすることが苦手です。小学生の頃は、何をするにも周りの目を気にしていました。だから何かやってみたいことがあっても、失敗するのを恐れて、挑戦するのをあきらめようとしていました。その度に行動できなかったことを後悔し、「次こそは」と心に誓う日々が続きました。中学生になってからは、その教訓を胸に、私はやりたいことには何でも挑戦しようと決意し、実践してきました。しかし、唯一挑戦しようかどうか、とても葛藤したことがあります。

私は小学六年生の頃から、生徒会というものに大きな憧れを抱いていました。生徒一人一人のために考え、よりよい学校生活を送れるように努力している姿が憧れでした。だから「中学生になったら絶対に生徒会に入る！」と思い続けていました。入学して半年後、生徒会役員選挙の時期になりました。私は一大決心をして立候補し、友達に推薦者を依頼し、たすきやポスター作りに奮闘しました。しかし、私には不安がありました。なぜなら、全校生徒の中に私のことをよく知っている人があまりいなかったからです。同じ小学校の出身者が少ない上に部活にも入っておらず、何と言っても私はとても人見知りな性格です。だからこそ立会演説会で強い印象を残さなければ、勝ち目はありませんでした。ライバルたちが熱心に取り組んでいる姿に不安が増し、「もし票が入らなかつたら……」と考えると、周りの目がまた気になり始め、「やっぱり諦めようかな」と思うようになっていました。でも挑戦せずに終わるのは悔しい……。

そんな時に私を支えてくれたのは、家族の存在でした。伝えたいことがまとまらず、苦戦している私に、いつも肯定的な言葉をかけてくれて、積極的にアドバイスをして

くれました。そして「大丈夫だよ」と私を勇気づけてくれました。私は小学生の時の教訓をまた胸に刻み、家族の励ましでもう一度前を向いて進むようになりました。そこから選挙本番まで、私は必死に努力しました。本番では家族の前で練習したようにジェスチャーを付けたり、大きな声で話すことを意識して全力を尽くしました。当選者発表の日には、心臓の鼓動が鳴りやまず、発表までの授業がまるで耳に入らなかつたことを今でも覚えています。校内放送で、「北奥桃嘉。」そう名前を呼ばれた瞬間、私は今までにない喜びを感じました。それほどこの生徒会役員選挙は、私にとって大きな挑戦でした。

今、私は生徒会長として、他の役員の人の力も借りて、小学生の頃憧れていた姿に近づくことができています。生徒のみんなから、「ありがとう」や「企画楽しかったよ」と言ってもらえるたびに、あのとき勇気を出してよかったと感じています。挑戦することは大事だとよく聞きますが、実行に移せなかつた頃の私には、その理由がはつきりとは分かっていませんでした。でも今なら分かります。どんな小さなことでも挑戦してみることで、自分の夢や目標を叶えることができます。そして、「挑戦できた」という経験は、必ず自信につながります。さらにその自信と達成感は、次のステップに向かう原動力になると思います。だからこそ、生徒のみんなにも失敗を恐れず、やってみたいことにはどんどん挑戦してほしいと思うのです。「挑戦」、それは私を作ってくれたもの。「挑戦」、それは私を成長させてくれたもの。どんなに怖くても自分を信じて、一步踏み出すところからまた私の「挑戦」は始まります。



優 良 賞

小さな行動がつくる未来

周南市立太華中学校 2年

ふな こし きら り
舩 越 煌 莉

私は毎朝、学校へ向かう途中に近くの川沿いを歩きます。季節によって変わる風景や鳥のさえずりが好きで、この道は、私にとって特別な時間を与えてくれる場所です。しかしある日、川の岸辺に空き缶やビニール袋が散らばっているのを見つけました。風に飛ばされたゴミが川に入って流れしていくのを見て、私は胸が痛くなりました。その光景は、私の心に深く残りました。

その日から、私は環境についてもっと真剣に考えるようになりました。学校の図書室で環境問題に関する本を借りて読んだり、ニュースやドキュメンタリー番組を見たりするうちに、私たちが暮らす地球が今、危機に直面していることを知りました。気候変動による異常気象、森林の伐採、生き物の絶滅、海洋プラスチック汚染、これらの問題は決して遠い国の出来事ではなく、私たち一人ひとりの生活とつながっているのです。

たとえば、毎日飲んでいるペットボトルの飲み物やコンビニのお弁当、便利な暮らしの中で、私たちは大量のプラスチックごみを出しています。世界では毎年約800万トンものプラスチックが海に流れ込み、ウミガメや魚など多くの海の生き物が命を落としていると知ったとき、私は言葉を失いました。このままでは、私たちの未来はどうなってしまうのだろう、と不安になりました。

でも、ただ「こわい」「ひどい」と思って終わるのではなく、「じゃあ自分にできることは何か」を考えることが大事だと感じました。私はまず、マイボトルを持ち歩くことにしました。最初は少し面倒だと思っていたけれど、今ではそれが当たり前になりました。むしろ誇らしく思えます。お気に入りのデザインのボトルを持つことで、楽しい気持ちにもなれました。また、家では家族と一緒にごみの分別を見直したり、使い捨てを減らす工夫をしたりしています。ラップを使わずに保存容器に入れたり、ティッシュの代わりに布のハンカチを使ったりと、小さなことの積み重ねです。こうした行動は目に見える変化をすぐに感じられるわけではありませんが、私にはとても意味のあることだと思います。

私がやっていることは本当に小さなことです。でも、もし同じように考え、行動する人が日本中、世界中に広がったら、それは大きな力になります。私は、未来をよりよいものにするためには、一人ひとりの「気づき」と「行動」が何よりも大切だと信

じています。

そして、もう一つ大事なのは、「学び、伝えること」だと思います。私たちは、環境についてもっと知る必要があります。なぜ気温が上がるのか、どうすればごみを減らせるのか、再生可能エネルギーって何なのか。学校でもっとこうしたことを学び、意見を交わす機会があれば、自分たちの未来を自分たちで考える力が育つと思います。また、子どもたちの声を社会に届ける方法も増やしてほしいです。私たちは選挙に参加することはできませんが、意見を持ち、行動することはできます。たとえば、地域で行われている環境保全のボランティア活動に参加することや、学校で環境新聞をつくれて発信することなど、できることはたくさんあるはずです。

私は先日、学校の友達と一緒に、通学路の落ち葉を拾ったり、ゴミを集めたりしました。最初は「ちょっと面倒かも」と感じていたけど、実際にやってみると「思ったより楽しかった」「もっときれいにしたい」という気持ちに変わりました。自分たちの手で地域をきれいにすることには、大きな意味があります。それは、自分たちの住む場所への誇りや愛情を育てることにもつながるのだと感じました。

こうした経験を通して、「やってみることの大切さ」を学びました。行動しなければ何も変わらないですが、行動すれば、自分自身の考え方や周りとの関わりも少しづつ変わっていくのだと思いました。

私が将来大人になったとき、今よりもっと環境に優しい社会になっていてほしいと思います。そのためには、今の私たちの行動がとても重要です。「どうせ一人の力じゃ何も変わらない」と思う人もいるかもしれません。でも、私はそうは思いません。一人の行動が周りの誰かを変えるかもしれない。そして、その誰かがまた別の誰かに影響を与える。そうやってつながっていけば、きっと社会も世界も少しづつ変わっていくはずです。

私たちの未来は、まだ白紙の状態です。そこにどんな絵を描くのかは、私たち次第です。私は、地球や人、動物が共に生きる優しい未来を描きたい。そのために、小さな一歩を大切に、これからも学び、考え、行動していきたいと思います。だから私はこれからも、身の回りの自然や生き物に目を向け、小さなことでも行動を続けていきたいです。一歩ずつでも前に進めば、未来はきっと変わります。



令和7年度少年の主張コンクール山口県大会実施要綱

1 趣 旨

次代を担う子どもたちが心身ともに健やかに成長するためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。少年の主張山口県大会はこれらの契機となることを願い実施するものです。

2 主 催

山口県青少年育成県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 共 催

山口県、山口県教育委員会

4 期 日

令和7年8月23日（土）

5 場 所

山口県教育会館（ホール） 山口市大手町2-18

6 実施方法

(1) 作品は、各中学校等を通じて募集する。

(2) 審査方法

(ア) 1次審査

各市町教育委員会、国立・私立・県立中学校、中等教育学校、総合支援学校は書類選考等による1次審査を実施する。

(イ) 2次審査

青少年育成県民会議は、1次審査通過作品を対象として、書類選考による2次審査を実施し、優秀者上位8名を決定する。

(3) 県大会

2次審査において選考された8名は、県大会で発表し、審査により、最優秀者1名、優秀者2名、優良者5名を決定する。

7 応募資格

山口県内の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。

8 発表内容

(1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

(2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

(3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由でユニークに、少年らしい飾り気のない言葉でまとめたもの。

また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：○○県にある○○旅館 良い例：○○県にある旅館 など。）

なお、作品は未発表、自作のものに限る。したがって、主張作文の執筆、推敲時に生成AIを利用してはならない。

9 発表時間

5分程度（4分半～5分半）

10 応募方法及び応募締切

（1）市町立の中学校

（ア）各中学校において取りまとめ、所管の市町教育委員会宛てに送付すること。

※各市町教育委員会への提出期限 7月 3日（木）

（イ）各市町教育委員会は各管内中学校から応募作品を取りまとめ、書類選考等による1次審査を実施し、選考作品を青少年育成県民会議事務局へ送付すること。

※県民会議事務局への提出期限 7月 17日（木）

（2）国立、私立、県立の中学校、中等教育学校及び総合支援学校は、直接、青少年育成県民会議事務局へ送付すること。

※県民会議事務局への提出期限 7月 17日（木）

11 表彰

（1）県大会における発表者に対しては、次のとおり表彰を行う。

最優秀者 1名 優秀者 2名 優良者 5名

（2）最優秀者を独立行政法人国立青少年教育振興機構主催の「少年の主張全国大会」の山口県代表として推薦する。

12 その他

- ・県大会当日の様子を録画・編集し、YouTubeに公開する。また、文集の発行や当県民会議の広報啓発資料に使用する。
- ・県大会に応募した作品の出版権は山口県青少年育成県民会議に帰属する。

13 問合せ先

〒753-8501 山口市滝町1－1
山口県こども家庭課青少年・家庭福祉班内
山口県青少年育成県民会議事務局

TEL 083-933-2634
FAX 083-933-2799

-大会審査基準・大会審査委員・大会の様子-

[大会審査基準]

審査項目	観点・留意点
論旨 内 容	(1) 銳い感性で、新鮮な主張であるか。
	(2) 自分の考えを自己自身の言葉で表現しているか。
	(3) 個人の体験に基づき、社会に訴える主張であるか。
	(4) 提案や提言を実践しようとする意欲が感じられるか。
	(5) 論旨が一貫していてわかりやすいか。
	(6) 内容に共感・感動できるか。
論調 表 現 態 度	(1) 共感と感銘を与えていたか。
	(2) 説得力のある話だったか。
	(3) 热意と迫力があったか。
	(4) 落ち着いて話していたか。
	(5) 聴き手に感動を与えていたか。

[大会審査委員]

山口県中学校教育研究会

国語部長

はまさき
濱崎
よしゆき
美幸
ひろかね
廣兼
あいこ
愛子

山口県PTA連合会

副会長

すえなが
末永
かづふみ
和文
なかしま
中島
み ゆ
実優
まつはし
松橋
み んご
美恵子

山口県教育庁学校安全・体育課

課長

令和6年度少年の主張山口県大会

最優秀者

山口県青少年育成県民会議

副会長

[大会の様子]

○少年の主張コンクール山口県大会 ○少年の主張全国大会 Web サイト





山口県青少年育成県民会議

〒753-8501 山口市滝町1-1
山口県こども家庭課青少年・家庭福祉班内

TEL 083-933-2634

FAX 083-933-2799